



クエーカー入門

ピンク・ダンデライオン著／中野泰治訳

◆四六判・並製・224頁・本体2400円

知られざる重要教派の歴史と信仰と活動。

17世紀イングランドで始まり、監獄改善、奴隷制度反対、反戦運動といった運動に与し、欧米型市民社会の形成に大きな影響を与えたクエーカー。その発展と分派の歴史、「沈黙の礼拝」や「聖化」などの中心的な教義、社会との関わりについて、社会学者である著者の明晰な分析で解説する。クエーカーの過去、現在、そして未来をも見渡す最良の入門書、ここに翻訳刊行。著者はパーミンガム大学名誉教授。訳者は同志社大学准教授。

関連の既刊書

森本あんり著

アメリカ・キリスト教史 理念によって建てられた国の軌跡

◆四六判・176頁・本体1700円

フスト・ゴンサレス著／石田学、岩橋常久訳

キリスト教史 上巻 初代教会から宗教改革の夜明けまで

キリスト教史 下巻 宗教改革から現代まで

◆A5判・上巻本体5700円／下巻5500円

【目次より】

日本の皆様へ

第1章 クエーカーとは？

第2章 クエーカーの歴史

第3章 礼拝

第4章 信仰

第5章 神学と言葉

第6章 エキュメニズム

第7章 クエーカー信仰の未来

6月25日発売

カール・バルト著／天野有編訳

教会と国家Ⅲ

東西冷戦の時代 バルト・セレクション6

◆文庫判・並製・587頁・本体1800円

「キリスト者共同体と市民共同体」、「国家秩序の転換の中にあるキリスト教会」など、戦後冷戦期の重要論考11編を精選し、新訳で贈る。特別解説「神に基づく政治」(B・クラッパート)収録。

岩井健作著

聖書の風景

小磯良平の聖書挿絵

◆A5判・上製・160頁・本体2500円

日本を代表する洋画家小磯良平(1988年没)が描き下ろした32枚の挿絵を1枚1枚読み解く。画家は聖書から何を読み取ったのか。



● 4月～5月の重版

トム・ハーパー／中村吉基訳／望月麻生絵
いのちの水 (2刷)

◆B6判・54頁・本体1500円

デイートリヒ・ボンヘッファー／森野善右衛門訳

共に生きる生活(ハンデイレ版)(3刷)

◆小B6判・227頁・本体1600円

福島旭

エクソダス 旧約聖書 (4刷)

(4刷)

キリスト教スタディーブックシリーズ2

◆A4判・160頁・本体1060円

フスト・ゴンサレス／石田学訳

キリスト教史上巻 (7刷)

(7刷)

初代教会から宗教改革の夜明けまで

◆A5判・439頁・本体5700円

ギョントナー・ボルンカム／佐竹明訳

新約聖書 (8刷)

(8刷)

◆小B6判・258頁・本体1600円

B・メロニ、R・イングペン／藤井あけみ訳

いのちの時間 (10刷)

(10刷)

いのちの大切さをわかちあうために

◆A4変形判・40頁・本体1500円

栗林輝夫著／西原廉太・大宮有博編

アメリカ現代神学の航海図

フエミニスト神学、ウーマニスト神学、アジア系アメリカ神学、ポストモダン神学、ポストトリベラル神学、修正神学、プロセス神学等々、複雑かつ活発な運動を絶やさないアメリカ現代神学の鮮やかな見取り図。〔栗林輝夫セレクション〕2。

◆A5判・予価5500円

関口安義著

評伝 矢内原忠雄

新渡戸・内村の薫陶を受け、伝道を志しつつ、経済学者として優れた業績を上げ、軍国日本と対決して野に退き、戦後は東大総長として再建日本の精神的指導に挺身した無教会キリスト者の生涯を、綿密な調査を基に描きあげた1100枚の大作。

◆A5判・予価8000円

ジョン・ディア著／志村真訳

剣を収めよ 平和の証人たち (仮題)

福音書に記されたイエスの言葉と振舞いに、それぞれの場で誠実に従い続けたキング牧師、ベリガン神父、ヘンリ・ナウエン、ジョン・バエズ、ティク・ナット・ハン、ソフィー・シヨル、トマス・マートンら平和の証人たちの足跡をたどる。活きた平和の神学。

◆四六判・予価1600円

●5月に出た本と雑誌

南島キリスト教史入門

奄美・沖縄・宮古・八重山の近代と福音主義
信仰の交流と越境

一色哲著



「南島」のキリスト教は、日本のキリスト教に従属しない独自の深さと広がりを持つ。なぜ南島には多くの教会が建てられ、現在でも多くの人の信仰を集めているのか。その歴史を丹念な調査と「交流史」的な視点から重層的に追究した力作。

◆四六判変・本体2200円

福音と世界

◆税込635円

6月号 特集 労働に希望はあるのか

寄稿者…笠原義久、渋谷望、旗手明、深谷美枝、要友紀子／
ブレイデイみかこ、森宣雄、植本一子、西川美和、辻学、
内田樹、若名定道、望月麻生、佐藤優

●先日、東京拘置所に行きました。東拘は足立区と葛飾区の境目のごくふつうの郊外にありますが、金網のフェンスの随所で監視カメラがしっかりと覗みをきかさずさまは、物々しいとしか言えないようがありません。現在の東拘の建物は新しく、中の生活も比較的穏やかだとは言われるものの、そこにある死刑執行室の存在を思うと薄ら寒くなりました。犯罪加害者・被害者やその周囲の人びとの個別の心情については私はどうこう言える話ではありません。ただ、死刑というかたちで国家に生殺与奪を許すことは、やはりきわめて危険だと思えます。

●6月の新刊は『クエーカー入門』（ピंक・ダンデライオン著、中野泰治訳）ですが、そこではクエーカーによる社会的証しの重要さが強調されています。17世紀イングランドで生まれ、分派を伴いながら世界へ広がったクエーカーの信仰は、非戦・反戦、監獄改善、奴隷制度反対といった活動の源となったというのです。キリスト教の系譜への理解を深めるうえでも、また内的な信仰と外的な働き方のダイナミズムを考えると、こうした知見は有意義で

す。とはいえ、ただ知るだけでは、クエーカーのように証しをしたことにはなりません。「知る」ことを目的とするだけでなく、「知るとは翻って何をすることか」という手段性への問いをもつて、同書を手に取ってもらえたらと願っています。（堀）

●11月に刊行したトム・ハーパー『いのちの水』が、思いがけず朝日新聞の「折々のことば」で取り上げられました（5月25日）。そのコラムで哲学者の鷲田清一さんは「恵み」を領る人々を諫めた寓話」と書いています。「領る」とは「我が物として占める、領有すること。元々は、いのちの水への純粋な感謝の思いから建立された記念碑。その善意がいつのまにか——おそらく自らの善意を疑うことなく——占有と管理の発想に転化し、結果的にいのちの水を否定してしまうアイロニーは、宗教に限らずあらゆる思想運動につきまとう悲喜劇なのでしょう。しかし、元の泉は地底深く封じ込められたとしても、心ある人々が流す「涙」の中に、いのちの水は湧出し続けていくのではないか——その希望を示唆してこの寓話は閉じられています。（小林）

福音と世界

2018年
7

A5判・80頁・定価635円・送料70円
年間予約購読料（送料共）8460円

特集・クエア神学とは何か

「クエア」な知の営み——周縁から規範を徹底的に問い直す—— 佐々木裕子

クエア神学の定義をめぐる諸問題——朝香知己「イエスとクエア」から「クエアなイエス」へ——クエア理論を用いた聖書解釈の新たな地平 小林昭博

教会をめぐるクエアな可能性——〈怒り〉の回復とその共同性に向けて——堀江有里

これからの「せい」の話をしよう——生なる、川江友二

現代に生きる主の弟子のあり方を問う

「連載より」 村瀬義史

- ◆野に咲く民衆の神学 4……………森 宣雄
- ◆地のいと低きところにホサナ7：プレイティみかこ
- ◆福音の地下水脈 9……………I KAZU G O K K E
- ◆みことば散歩 19……………望月麻生
- ◆現代神学の冒険 22……………芦名定道
- ◆聖書とわたし 28……………國分功一郎
- ◆新約釈義 第一テモテ書 29……………辻 学
- ◆レイナスの時間論 40……………内田 樹
- ◆佐藤優のことばの履歴書 52……………佐藤 優
- ◆詩篇の思想と信仰 155 詩篇149篇……………月本昭男